
四季と断末魔

ジミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季と断末魔

【Nコード】

N5585D

【作者名】

シミー

【あらすじ】

季節ごとに恋愛対象が変わるお話……。急な転校を強いられた主人公。けどそこには以前の旧友がいて……。そこから始まる4つの恋物語。

プロローグ（前書き）

結構長くなる予定です。

ブローグ

列車の窓から空を見上げると、寂しい鉛色をしていた。

これから生活の拠点がここに移るんだと思うと、憂鬱になる。

父親が急遽転勤となり、この異郷の地へと引っ越さなければならなかった。

当然仲良かった友達とも離れる事になる。嫌だったがこればかりは仕方がない。

がたん、がたん、ごとん。

がたんがたん、ごと、がたん！

最近の列車は、揺れが少ないと思っていたけれど、今乗っているこれは、かなり揺れている。

更には、平日の朝8時だというのに、乗客が少ない。1つの椅子に、座っている人が1人か、2人かだ……。それも、会社に行くために移動をしているサラリーマンではなく、私服姿の、人たちだ。中には、子連れ親子もいる。

平日の朝に、どこへ行くんだと思ったけれど、5時ごろからずっと揺られている俺は、退屈すぎて何も考えたくない。しかも、すごく眠い……。

本当に突然だった。昨日の晩、父親が急に転勤になったから、明日にでも引越すぞと言ってきた。用件だけを伝えた父親は、ささと自室に戻り、その日に終わらなかった仕事を片付けに行ってしまったようだ。

そんなもんだから、俺は友達にロクにさよならも言えず、メールだけで済ました。本当は、学校で会って、色々と話したかった。

昨日の帰り際に友達に向かって『また明日ね』と言ったが、その言葉は意味がなくなってしまった……。

母親は学校に電話をして、それだけで転校手続きを済ましてしまっていた。そして今日から通う学校にも電話をして、1日で転校、引越しが決まった。引越し先を聞いたとき、どこかで聞いたような地名だったけれど、忘れてしまった。

あとで地図で確認をしたら、かなりの距離があることが分かった。

んで疑問が1つ。俺たち家族が住む家はどうなるのか。

答えは、なんと都合の良いシナリオのように、新築の家が既に用意されているらしい。住んでいた家と土地は売りさばいて……あとは良く聞いてないから分からないし、知りたくもない。

……つい最近、ほんの2週間前に学年があがったばかりで、せっかく新しく仲良くなった友達がいたのに、これからは誰一人と知らない学校で過ごさないといけないと思うと、不安を感じる。

気付けば、俺はもう眠っていた……。

第1章 旧友（前書き）

書き換える可能性があります。

第1章 旧友

トゥルルルルルルルル。プシュー。

列車が目的の駅に到着した。

……あれま、本当に寝ちまったみたいだな。ちょっと前の記憶が全くない…。

あるのはわけの分からん夢の内容だけだ……。

まあ、さつさとしないと電車のドアが閉まってしまうので早く移動してしまおう。親にもおいていかれそうだし……。

駅から少しでて辺りを見渡す。……なんだろう、何故だかこの風景に見覚えがある。

周りには家とか店とかの建物も多いが、木や鳥たちもいて自然もちゃんと残っている。

何か懐かしい気がする……。もしかして俺はここに来た事があるのか？ 確か地名を聞いた時にも、同じような感覚になっていたが……。

……なんとなく思い出してきた。

そうだ。俺はここに1度だけ来たことがある。確か、あの日だから6年前だ。

あの日は……。当時俺が小5の時、すんげえ仲の良かった親友と唯一呼べるべきやつがいた。そいつは、今の俺みたいに、突然転校して行ってしまった。その時は携帯なんか持っていなかったし、

忙しかったのか電話1本もくれずに、あいつは去って行ってしまった。

だがしかし。何と転校していった次の週の休みに再び俺の目の前に現れた。

その時には仲の良いと、本当の意味でいえる人はそいつしかいなかったから、一瞬幻が見えたのだと思ったが、幻が俺の体に触れることなどできるわけがないから、目の前にいるそいつは本物なんだなと思った。

そしてそいつは、有無を言わずに俺を自分が引越した場所まで連れて行った。その日は午後だったし、電車で何時間もかかるところなので、つく頃にはもうとつくに日が暮れていた。

そいつの親が俺の家に電話をかけて事情を話して、まあ次の日も休みだから、一晩泊まらせてもらって翌日遊んだんだ。

その遊んでいた場所と、今俺が歩いている道から見える景色は、ほとんど俺の記憶に一致している。

という事はなんだ。俺の転校先とそいつの転校先が同じだって事なのか？ それは俺にとっては嬉しいな。一人でも知っている人がいれば、学校での環境も大きく違うだろうし、気も楽になるし……。なんといっても俺はそんな親友に会いたいわけでもあり……。

でもそいつの名前は忘れてしまった。なんて言ったか……。確か読みは難しかったけれど、覚えやすかったような気がする……。

そして、そのあまりにも難しい読みのせいで、かなり変なあだ名を付けられていたな。

よし、そのあだ名を思い出したぞ。あだ名を思い出せば、自然と本名も浮かんでくる…。

ああ、懐かしい友達の事を考えていたら、いつの間にか今日から我が家となる家にたどり着いていた……。

第1章 旧友（後書き）

こんな小説を読んでくれてありがとうございます；w もし良かった次話もよろしくお願いします^^

第2章 新しい家

その家は、新築特有の木のおいがした。
聞いている通り、とても綺麗な家であった。まさか……本当にタダで住めるのか……ここ？

「お父さんの仕事の人たちが用意してくれたのよ、この家」
本当にまさかのように……。俺の父親、恐るべし……！

「全く……この家残してさっさと出て行ってくれないかしら、あのダボ野郎……」

実はうちの夫婦仲は最悪だったりもする……。

外見だけでもかなりの高級感漂う感じがする。

……さて、中に上がってみるか……。

……やけに部屋数が多い。しかも無駄に部屋が広い。
前まで住んでいた家とはエライ違いだ。自分の部屋なんかなかったし、居場所は家族全員が使うリビングしかなかった。寝室は辛うじて一人部屋だが、狭くてとても自分の部屋にはできなかった。

「翼は2階の右側の部屋を使いなさい。一番広いから」

おお、マジか。マジで自分専用の部屋が手に入るのか。転勤バンザイ！

「でも1階はリビングと浴槽と台所以外は全部お父さんの仕事部屋になるから、入っちゃだめよ？」

はいはい。……ってかこんだけの部屋数が全部仕事部屋になるって……俺の父親はそんな大変そうな仕事に就いてたっけな？ もしかして、どっかの会社の部長ぐらいまで昇進してるのか？

……でも実はどん仕事やってるかなんて知らない。興味はあるが、別にそこまで知りたいわけでもない。

「部屋割りはこっちで済ますから、翼はさっさと荷物を置いて学校に行きなさい」

母親は俺にそういい、学校までの地図を渡した。

しかし、良く見ると……これ、2万5千分の1の地図じゃないか……。

クソ……ちょっと細かすぎるではないか……。

時刻は9時40分。10時には学校に着かないとまずい。

でも学校は徒歩10分もかからない場所にあるので、案外余裕だ。

学校までの道筋はほとんど1本道であるため、この見にくい地図を使うことなく歩を進められる。

早くこの街に慣れるためにも、地図に頼るのは良くないしな。

今は10時前なので、車もあまり走っておらず、歩行者もいなければ自転車もない。やはり転校生の身であるから、あまり人とはすれ違いたくない。もしも普通に8時半登校なんかしてたら、同じ制服を着ているやつらから嫌な視線が飛んで来るに違いない。そのぐらいなら、今一人で学校に向かって、一人で職員室まで行って、先生に連れられて教室に入ったほうがマシだ。

現に今俺は、俺の理想どおりの転校に事が進んでいる。
……さあ、今日から通う学校が見えてきたぞ……。

第3章 委員長

学校の周りには、桜の木が何本か植えられていた。

時期はもう4月の下旬なのに、満開に近い状態で咲いていた。この地域だからだろうか、俺が住んでいた場所では既にもう桜は散っていた。

ビューーっと強めの風が吹いて、花びらがヒラヒラと舞い落ちる。手を出してみると掌に花びらが落ちてきた。雪みたいだ……。

桜の花びらに打たれながら登校する風景は、なんとなく趣がある。しかも自分一人だけだ。

校門まで来ても、誰とも会わなかった。校門には警備員がいるのが普通だと思うが、この学校にはいないようだ。

俺はあんまり目は良くないから、結構近くまで来ないと、どんな造りになっているか分からない。遠くからでも、ここは学校なんだとぐらいいは分かるが、細かいところまでは良く見えないのだ。

……メガネがそろそろ欲しいと思う。でも、俺には似合わないって、友達のメガネを借りてかけた時に言われた。：コンタクトはちょっと面倒だからしたくないが、もうそろそろ考えた方がいいかもしれない。

やがてサー、サーっと砂を擦るような足音が聞こえてきた。

「あ……あの、石河…翼君ですか？」

え？

いつの間にか目の前には、紺のブレザーを着た、髪の毛の長い女の子がいた。

誰なんだろう……俺のフルネームを知っているという事は、俺を知っている人なのだろうが、俺にはこんな綺麗な人の知り合いはいない。

「私、2年2組の月島 つきじま 香織 かおり といいます。クラスの委員長をやっていて、先生に転校生が来るから迎えにいつて欲しいと頼まれました。あの……石河君ですよ？」

ああ、なるほど。だから俺の名前を一方的に知っているわけだ。

「うん、そうだよ」

「えっへへへ、良かった。うん、これからよろしくね！」

「ああ、うんよろしく」

「ところで学ランを着てるってことは、まだこの学校の制服もってないみたいですね？」

「ああそうなんだ。昨日急に転校が決まったから、まだ注文してないんだ」

「やっぱりそうですか。私達も今さっき急に転校生が来るって聞いたんですよ。昨日までは誰一人としてそんな情報入ったこと知らなかったみたいです。先生も」

そりゃ、転校の手続きを済ましたのが昨日の夜だから、この学校

の生徒にとっては今日の朝に情報が入るはずだからな。

「でもこんな中途半端な時期に転校って大変だったでしょう。何かあったのですか？」

「いや、ただ父親が急に転勤になったから引越したただけだよ。別に実は宇宙人だとか、変な能力とかは俺持ってないから安心してね？」

「あはは……。私も別にそういう人探しているわけじゃないから」

委員長は笑いながらも、ちょっと困ったような表情を浮きべた。

「ちょっと気になった事あるんだけど良いかな？」

「はい、何ですか？」

「あのさ、もしかしてこの学校って校則緩い？」

「あ……なんで分かったんですか？ 確かにすごく規則は甘いと思いますけど……」

「だって君、金髪じゃないか。染髪許す学校……それに中学ではまずないと思うけど」

「こ、これは地毛なんですぅ……!!」

両手をじたばたされて訴えるこの子の仕草が愛らしいと思う。多分しょっちゅうからかわれているような人なんだなと思った。

「話は戻して、この学校は携帯持込も大丈夫なんですよ。さすがに授業中はまずいけど、休み時間に使用する分には問題ないのです」
義務教育でこれだけ甘くする学校はどうなのかと思ったが、もう考えるのが馬鹿らしくなった。

「ということは、お菓子とかの持ち込みもOK？ iPodの持ち

込みも可？」

「もちろん。誰もが持つてきているものです」

既に予想をしていた答えが返ってきた。

学生にとってはすごく嬉しい学校のように思えるだろうが、比較的常識派な俺にとっては信じられなかった。

「という事はこの学校は不良が多い？ 校舎の窓を全部割って回るような……」

「そんな人はいませんよ！」

……？ 辻褄があってないような気がする。

「そんな生徒は一人もいませんよ。学校長は生徒を信用して、色んなものを持ち込み許可していますから。授業中携帯使って注意された人の話なんて聞いたこともないし、見たと言う人もいません」

……それもそうか。

「さて、ちょっと長話しすぎましたね。先生や皆が待っています。校舎に入りましょう。私についてきてください」

俺は言われたとおり、これから一緒に勉強する事になるクラス委員長の後についていった。

第3章 委員長（後書き）

ちょっと長くなりました；これからちょっとずつ面白くなってく
れると思います…。

第4章 つかみはOK? (前書き)

約1年半以上もの期間が開いての更新ですね。反省しています；
これから頑張れるだけ頑張りますので、どうか暖かい目ですろし
くお願いします！

第4章 つかみはOK？

2年2組。下駄箱の横側にはそう貼り紙が貼ってあった。

どこの高校も、入り口はそう大して変わらないな。

扉を開け、靴を入れる。すると、何かがひらひらと落ちていく。

拾い上げてみると、“ 粕山 飛鳥さま ”と書いてある。

「ああ……。ここの下駄箱、もともとは粕山^{もみやま}飛鳥^{あすか}という人のだったんです。でも2年になるとすぐに中退してしまつて……。とても人気があるので、ラブレターが毎日絶えなかったそうですよ」

「そうなんだ……」

2年にあがつて中退とは珍しい。留年が決まつて中退なら珍しくもなんともないけど。

「すごく綺麗で、可愛らしくて、頭も良くて。気さくで明るくて、ちよつとおつちよこちよいだけど、良いところあげればキリがないくらいの人なんですけど。急なことでみんな寂しく思っています。誰一人中退の理由は知らないようで……」

「……………」

俺には全然わからない話だけど、この人の像はうかがえた。

「ところでこの手紙どうしようか」

「では私が預かっておきます」

委員長は俺から手紙を受け取り、大事そうにポケットにしまった。

「教室は3階です。行きましょう」

「うん」

「緊張しますか？ やっぱりこういうのは」

「まあね。でも君と話せて気が楽になったよ。やっていけそうな気

がする」

「それは良かったです。あなたなら、すぐに打ち解けるでしょう」
目の前にはついに教室の扉が。とうとうやってきた。この時が。

1度深呼吸。気持ちを落ち着かせ、呼吸が整ったらすぐに開ける！
ガラガラガラ！

『……………』

教室のいたるところから俺への視線が痛い。

お、重い……。なんだこの空気は。

異常を読み取った担任の先生がようやく助け舟を出してくれた。

「あー待ってたよ。じゃあ早速さつき話した転校生を紹介する」

「石河翼です」

先生に促されるよりも先に、自分から名乗る。これ極意。

「石河君はとても面白くて、いい人ですよ」

委員長がそう笑いながら言っただけで席に戻っていく。

うっは……。ハードル上がったよ。

「まあ時間も時間だから、今は授業を始めよう。仲良くするように
な。席は……ひとまず月島の隣でいいだろう。教科書見せてやれ」

「はい」

てきぱきと物事が進んでいく。あれ、これで終わりでもいいのか？

俺名乗っただけだぞ。

周りの人たちだっただけで落ち着きがない感じだ。

「担任の長谷川先生。教科は英語。だから今は英語の授業です」

小声で委員長がそう教えてくれた。

俺は内心慌てつつも、先生は授業を始め、周りも勉強モードに入
っているから、とりあえずは俺もノートを広げ耳を傾ける。

こんなんでやっていけるのか、もの凄く不安だ。

その不安も、昼休みになるとすぐに解消された。なぜなら今俺の
周りには、

「んで俺はサッカー部。楽しいぜ」

「俺軽音部。ドラムやってるぜ。こうダンドンダンって」

「石河君いないの？ いたでしょ地元じゃあ！」

……俺はクラスの人たちに囲まれ質問攻めを受けているからだ。

にして、普通はこうはならないだろう。この学校に転校してきたからこそ現象だ。

「……ようやく、またあの時のようになれんのかな。なあツバサ？」

「ああ……きつとなれるさ、ユウ」

ちよつと前までは名前も忘れてしまっていた古き友。部田^{とじた} 裕^{ゆう}の存在で。

英語の授業が終わった後の休み時間。

「あの……さ」

何の前触れもなく、俺の目の前に一人の男がやってきた。

「ツバサ……ツバサ、だよな？ 俺だよ俺、わかるだろう？」

始めはピンとこなかったが、男の目を見続けているうちに、徐々に昔の記憶が蘇ってきた。

俺が一番好きだった頃のこと。その時にいつも俺の隣にいたのは、確かにこの男の目の主だった。

つまり、こういうことだ。

「ユウ……ユウなんだな？！」

「おうよ！ ユウ様だぜい！」

ガシッ！

ユウは俺に抱きついてきた。

周りは異様な目で俺たちを見ている。でも気にしない。

だって、6年ぶりの再会だぜ？

「ツバサーーツバサーー」

「ブターーブターー。部田だからブターー」

ガシバシブシッ！！

迅速なパンチを喰らった。

「いやいや、これでこそ……ブタだな」

「だからそう呼ぶなって！ こっち来てから一度も呼ばれてないんだぞ！」

「よっしゃこの俺が広めてやるよ！ ブターバター！」

「てんめ、転校１日から調子乗るとはいい度胸だな。喰らえー！」

俺は自分に置かれた状況も忘れ、騒ぎに騒いだ。

あまりの騒々しさに、自然とギャラリーが集まって、今に至るとのことだ。

第4章 つかみはOK? (後書き)

これから学校生活が始まります。

自然と筆が進みやすく……なってくればいいのですが・w・w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5585d/>

四季と断末魔

2011年1月16日14時29分発行